3 大井実のBOOKな話

福岡市内で書店『ブックスキューブリック』をいとなむ大井実さんの、本のある日常をつれづれに。

撮影／川上信也

大人への入り口で出会った作品は、生涯忘れることのできない、大切な宝物です

小学校高学年の頃、スヌーピーの漫画に熱中していた時期があります。ハマって読んでいたのが、鶴書房という、今はなくなってしまった出版社から出ていた「ア・ピーナッツ・ブック・フューチャリング・スヌーピー」（現在は角川書店）というシリーズで、翻訳が詩人の谷川俊太郎さんでした。私はその時初めて谷川さんを知ったのですが、それからちょうど40年後の昨年9月、ブックスキューブリックのイベントで谷川さんをお呼びし、トークショーを開催しました。

マイペースで夢想家のスヌーピーと、彼を取り巻く、チャーリー・ブラウンやルーシーといった個性的な脇役たち。作者シュルツさんの描く漫画には大人社会の縮図が描かれていて、小学校の高学年という多感な時期に、ちょうど大人の世界をのぞき見るような気持ちで読んでいたように思います。スヌーピーはそれ以来、ずっと自分の中のロングセラーであり続け、奇しくも40年後にその訳者であり憧れの方と実際にお会いできた。私にとってすごい出来事です。余談ですが、トークショーの際、当時読んでいたシリーズを谷川さんにお渡ししたところ、とても喜んでくださって、後日、貴重なスヌーピーの限定本を贈ってくださいました。

そういうわけで、今月のテーマは〝大人への入り口〟。アルバムは、高校1年生の頃にレコード盤が擦り切れるほど聴いていた、フリートウッド・マックの「噂」をご紹介します。

イーグルスの「ホテル・カリフォルニア」と同じ頃に大ヒットしたアルバムで、ポップスとロックが見事に融合した素晴らしい作品です。特に1曲目の「セカンド・ハンド・ニュース」を聴くと今でもすぐに高校時代に戻れるほど（笑）。

明るいだけでなく、どこか影の部分も見え隠れする曲の数々は、楽しさの中に皮肉がこめられていたり、ひねりの効いた表現も満載の、スヌーピーの漫画と少し共通しているように思います。